

I 事業の概要（地域の実情含む）

田老地区の復興工事も終盤となる中、震災を鮮明に記憶する生徒の数は少なくなり、生徒の会話から震災の話を書くことはなくなった。震災の記憶の風化と次の時代の担い手となる若者の人口減少が大きな問題となってきている。

津波防災の意識を高め、震災後の地域の課題に向き合い、地域の担い手としての自覚を育てることをねらいとする。

II 取組の概要

1 事前学習（朝読書の時間を活用）

①事前学習プリント…三陸鉄道について

②事前学習プリント

ア 震災時の三陸鉄道の状況と役割

イ うのすまい・トモスの意味

ウ いのちをつなぐ未来館の内容

③事前学習プリント…鯨と海の科学館の内容

2 全校遠足（震災学習列車活用スクール）

①震災学習列車活用スクール（宮古―鶴住居間）

ア 震災当時の状況と取組の説明、三鉄の使命

イ 復興状況の説明と確認



②いのちをつなぐ未来館

ア 震災当時の状況説明と見学

イ 実際の避難経路を体験するワークショップ

ウ 津波の仕組みと怖さを知る

エ 釜石市防災市民憲章「命を守る」

③鯨と海の科学館

ア 震災当時の状況説明と見学

イ 山田町と鯨の関係を知る

ウ 復興への思いと道のり



(3) 事後研修

- ①全校遠足ワークシート（研修レポート）を記入することでこれまでの自分との違いを確認した。
- ②グループ毎にポスター発表を行い、クラス代表を選出し、9月の宮北の森（全校集会）で各クラスの代表が、ポスター発表を行った。このことにより、それぞれの体験を共有し、自分たちの防災意識を高めることができた。



III 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 震災の記憶は風化するため防災教育を実施し、語り部として語り継いでいくことや避難経路を実際に確認することの大切さを学ぶことができた。
- (2) 報道されていたことと実際の状況が違うということを知ることで、震災の状況を深く知ることができた。
- (3) 震災当時の高校生や中学生の行動が大きな役割を果たしたということを知り、自分たちの存在の大きさを知ることができた。
- (4) 自分の命は自分で守ること（津波てんでんこ）の大切さを改めて認識することができた。

(5) 津波の怖さと高台避難の重要性を体験することができた。

(6) 全校遠足ワークシート（アンケート調査）
75名中73名が回答(97%)

①三陸鉄道について

ア 三陸鉄道の宮古-釜石間が、今年の3月23日にJR東日本から移管されたことを知っていましたか。

(ア)はい 知っています 48名(66%)

(イ)いいえ 知りません 25名(34%)

イ 3月23日以降、通学以外で三陸鉄道を利用して釜石方面に行ったことはありますか。

(ア)はい あります 5名(7%)

(イ)いいえ ありません 68名(93%)

ウ 三陸鉄道をもっと多くの人に利用してもらうためのアイデアを提案しよう。

- ・各駅の近くの名所にスタンプを置いて、スタンプラリーの企画を考える。
- ・地域の伝統文化とコラボしたイベントを企画する。
- ・田老の学ぶ防災と連動する防災学習。
- ・夜の三鉄観光列車（満月、花火、漁り火）。
- ・三陸の食文化を活かした食べ歩きツアー。
- ・アニメとのコラボ列車を企画する。

②いのちをつなぐ未来館について

ア いのちをつなぐ未来館のことを知っていましたか。

(ア)はい 知っていました 6名(8%)

(イ)いいえ 知りませんでした 67名(92%)

イ 釜石 鶴住居地区を訪れたことはありますか。

(ア)はい あります 21名(29%)

(イ)いいえ ありません 52名(71%)

ウ 津波防災への意識は高まりましたか。

(ア)はい 71名(97%)

(イ)いいえ 2名(3%)

③鯨と海の科学館について

ア 鯨と海の科学館のことを知っていましたか。

(ア)はい 知っていました 38名(52%)

(イ)いいえ 知りませんでした 35名(48%)

イ 鯨と海の科学館を訪れたことはありますか。

(ア)はい あります 21名(29%)

(イ)いいえ ありません 52名(71%)

④まとめ

ア 今回の全校遠足を通して、津波防災の大切さを感じましたか。

(ア)はい 73名(100%)

(イ)いいえ 0名

2 課題

- (1) 今回、学んだことを、繰り返し形を変えて継続的に取り組んでいくこと。
- (2) 次年度のコース設定について検討しなければならない。
- (3) ガイド料を報償費で支払うことが困難である。
- (4) この取組が本校のみで終わるのではなく、内陸の他の高校にも波及できる形にしたい。

IV 生徒の感想

1 震災学習列車を利用して学んだこと

- ・ 防潮堤の存在が人の心を油断させてしまうので、安心してはいけないということ。
- ・ 死ぬ確立が1%でもあれば、避難すること。
- ・ 想定外のことが起こるという意識を持つ。
- ・ トンネルの中で明かりを消したときに恐怖を感じた。
- ・ 地震があつたら、高台避難。津波がきたら戻らないこと。
- ・ 8年経っても復興はまだまでである。訓練の成果で被害を少なくすることができる。
- ・ 当時の運転手の手記を聞いて、心が痛くなった。震災があつたからこそ、対策を練ることができたことを学んだ。
- ・ 震災当時と現在の三陸鉄道の役割が非常に大きいものであること。

2 いのちをつなぐ未来館で学んだこと

- ・ 実際に避難経路を体験し、どこまで津波がきたのかよく分かった。
- ・ 「10のメッセージ」を忘れず、伝えていくことが大切だと思った。
- ・ 三陸海岸に押し寄せる津波の特徴を知ることができた。
- ・ 「釜石の奇跡」の裏では、防災センターで多くの方々が亡くなった。高台避難の大切さを実感した。
- ・ ハザードマップで避難場所を常に確認しておく必要がある。

3 鯨と海の科学館で学んだこと

- ・ 山田町と鯨の関係や復興までの苦労について学びました。

- ・ 山田町では、昔、イルカが盛んに捕られていたと知って驚いた。
 - ・ 多くのボランティアのおかげで再興できた。
- #### 4 全校遠足を通して学んだこと
- ・ 災当時のことを学び、改めて被害の大きさを実感した。まだまだ知らないことがあるので、個人的にも調べていきたい。
 - ・ 震災の恐ろしさが記憶の中から風化していたことに気づかされた。今回の経験を多くの人に伝えていきたい。
 - ・ 津波に対して認識が甘かった。苦しかったことや辛かったことなど震災当時のことを知ることができた。
 - ・ 宮古のことしか知らなかったの、釜石や山田の被災状況を知ることができ、防災意識が更に高まった。
 - ・ 震災当時は、小学校1年生だったので、津波への恐怖心や記憶があまりなかった。今回の体験を通して津波の怖さを学ぶことができた。
 - ・ 実際に震災を経験した人の話が人の心に伝わるので私たちが語り部として役割を果たすことが一番の防災になると感じた。